
『憎しみ』 【掌編・駄文】

山田文公社

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『憎しみ』 【掌編・駄文】

【Nコード】

N4456Q

【作者名】

山田文公社

【あらすじ】

レベルという鉱石を巡る物語。

『憎しみ』作…山田文公社

空が青色を越えて透き通り、掠れた雲がちぎれて東へと流れていく。太陽が少しずつ西へと傾いていく。もうどれぐらいこうしているのだろうか、思わず世界が平和なのではないかと錯覚してしまうほどに、時は静かに流れている。

「ジェス兄ー！！」

足下からシエスタの声が聞こえてきた。しばらくすると足音と共に、目の間にシエスタの顔が現れた。短い緋色の髪に良く日に焼けた顔には、所々泥がついていた。

「もう、ジェス兄！ またサボって昼寝してる」

シエスタは顔を膨らませて非難を始めようとしていた。仕方ないので、ポケットからレベルの欠片を取り出して、シエスタに手渡した。

「これ……ジェス兄、いいの？」

「ああ、取っておけ」

シエスタはまじまじとレベルの欠片を眺めていた。確かにこの辺りで採掘できる大きさにしては、ずいぶん珍しいサイズだった。

「ありがとう！！」

シエスタは満面の笑みで礼を言うのを見て、俺はまた瞼を閉じた。しばらくすると足音が遠くへと去っていくのが聞こえた。

レベル……大陸は高度の魔法文明で栄えていた。都市部の生命線は多くの魔力を蓄える魔鉱石“レベル”によって支えられている。しかし都市部に供給するレベル鉱山には大きな問題があった。それは……。

目が覚めると村へと戻った。村の中央には多くの人だかりが出来ていた。それは採掘されたレベルを査定し買い取る商人達に、採掘者が群がっているのだ。

採掘者の多くは子供や青年だった。レベルには重大な問題があった。

「エリルー!!」

悲痛な叫び声が騒然とする中に響き渡った。見ると若い娘が少年を抱えて泣き叫んでいた。それはレベル採掘者につきまとう問題だった。魔鉱石“レベル”は生命エネルギーを奪い魔力を蓄えている。つまりレベルには人の命を吸い上げる力があるのだ。

命を蓄えた石は赤く光り高く売れる。レベルは大きさに比例して命を吸いあげて蓄える力も増大していく。商人達が少年を抱える若い娘へと集まっていく。口々に商人は娘に言葉をかけている。娘は少年を抱えて泣いていた顔を上げて叫んだ。

「ふざけるな! 人殺し!」

商人達は顔を見合わせてなにやら言葉を交わして、一人の商人が言った。

「君もついでに買ってあげるからさ、その子、赤い石持っていない?」

値踏みするように、商人が上から下までなめ回すように娘を見ていた。

「お前ら言い加減にしろよ」

商人達の背後から釘を刺すように俺は商人の肩へ手を置いた。

「てめえら、いい加減にしろ!」

すると隣から、もう一人の青年が商人を殴り飛ばした。

「石が欲しけりゃ、あっちに行きやがれ!」

青年は指を人だかりが出来る場所を指さした。すごすごと商人達是人だかりの出来た場所へと向かっていく。商人達は口々に『出来損ないのクセ』に『ゴミめ』などと言い、買い取りしている場所へと向かっていく。

「大丈夫かミーナ」

青年は心配そうに、娘に声をかけた。娘は息絶えた少年を抱きかかえてたまま、首を振り答えた。

「ごめんね、クロードしばらくそっとしておいて」

そう言い少年を抱えて深く俯いて、泣き始めた。

「ああ、すまないな知り合いだったから、ついカッとなってさ」
クロードと呼ばれた青年はこちらに気づき声をかけてきた。

「良いんだ、俺も知り合いだったら殴り飛ばしていたよ」

そう言い俺はクロードに手を差し出し名乗った。

「ジェスだ」

「俺はクロードだ」

そう言いクロードと俺は握手を交わした。レベル鉱山には周辺の村から人が集まってくる。クロードは西の村のバリスに住んでいると言った。

「いつか俺はこんな場所から出て街へ行くよ」

クロードは人だかりの出来る買い取り場所を見つめながら、続けた。

「そしてあいつらが働かなくて良い世の中にするんだ」

クロードの顔は真剣に、群がる少年達に向けられていた。

「でも、勘違いするなよ、俺は過激派みたいにレベルを無くして、どうこうしようって訳じゃなくて、もっと安全な方法で、誰も死なない方法でレベルを採掘する方法を産み出すんだ……あいつらの為に」

そう言いクロードは俺の顔を見た。

「良い考えだな、俺も協力するよ」

そう言い俺はクロードに手を差し出した。

「ああ、そのときは頼むよジェス」

クロードと再び手を組み交わしていると、買い取り場所からこちらにシエスタが走ってきた。

「ジェス兄ー！！」

シエスタの姿を見たクロードは質問してきた。

「弟か？」

おれは首を振り答えた。

「いいや、あいつがまだ小さい頃、あいつの兄貴からあ頼まれて、それから俺はあいつの兄貴なんだ」

クロードはシエスタを見て、小さく頷いた。

「お前……良い奴だな」

クロードはそう言い、頭をかいた。

「クロード、お前ほどじゃないさ」

俺はそう言い走ってきて不思議そうな顔するシエスタにクロードの紹介をした。

「へえー、ジェス兄の友達かー、オレ、シエスタって言うんだヨロシクな」

「おれはクロードだ、よろしくなシエスタ」

シエスタは嬉しそうにクロードと握手を交わしていた。

解散時間までクロードと俺は多くの言葉を交わした。

サイレンが鳴り響き解散時間となった。レベル採掘の流れは、早朝に周辺の村から採掘者達が集まり、レベル鉱山に向かい採掘し昼を過ぎた辺りで採掘は終了し、集合した村で採掘した鉱石の買い取りが行われ、時間になるとそれぞれの村へと解散となっている。

「じゃあな、ジェス」

「またなクロード」

「またなー、ジェスの兄ちゃん！」

それぞれに別れの言葉を交わして、夕日が沈むなか村へと帰っていく。

「ジェス兄、嬉しそうだ」

シエスタは俺の顔を見て、そう言った。

「そうか？」

「うん」

俺はそう言われて少し俯いた。

「そうか……」

俺とシエスタは歩きながら村へと歩いていく。

村に着くとシエスタは家へと走って帰っていく。俺も自分の帰る場所へと足を進めた。周囲からは浮いているこの場所が俺の家だった。扉をくぐると肥太り頭の禿げあがった悪趣味な派手派手しい服に身を包み、指という指に宝石の指輪をつけた、杖を手にした男が出迎えた。

「ジェス、遅かったわね、他の子はもう戻ってとくに食事は終わったわよ、ちゃんと時間にもどらないと食事は抜きだって事未だにわからないのねこの子は、で……ジェス今日の稼ぎは？」

空っぽの革袋を男へと投げ渡すと、男は革袋を覗き足下に捨てた。そして手にした杖で俺を殴り始めた。

「この、役立たずめ、お前を育てるのにどれだけの金がかかったと思っっているの！！」

無抵抗の俺を何度も杖で殴りつけた。しばらく殴り続けたあと、肩で息をしながら男は屋敷へと入っていく。

「お前も馬鹿だねえ」

物陰から様子を見ていたトルードがタオルを手にして現れた。

「院長を怒らして殴られるのが趣味なのか？」

冷たい水に浸されたタオルが打たれた傷口の熱を冷ました。

「黙って言うこと聞いていれば殴られなくて済むのにさ」

そう言って、トルードは食事を手渡してくれた。

「口の中の傷が落ち着いてから喰えよ」

そう言い、屋敷へと入って行った。俺も屋敷へと入っていく。屋敷の中には多くの子供達が走りまわって遊んでいた。俺が育ったのはこのドンベルク孤児院の中だった。親の顔は知らない。ここにいた奴らは、みんな捨てられた奴らだった。だから血のつながりはな

いけれど家族同然だった。ただ院長が息子に代わってからは、色々
と変わった。とくに息子は公共事業のレベル採掘には力を注いだ。

俺たちの事を金儲けの道具にしか見ていなかった。

レベル採掘で兄弟達が死んだ。外側だけ悲しみ、採掘を続けさせる
院長を俺は心底嫌った。だから俺だけは何も採掘しないで帰る。
先代と良く反した場所に腰をかけてパンを口へと運んだ。小さなも
う動いていない噴水に二人で腰掛けて色々と言った、その先代はも
ういない。

ひとしきり食事が終わった俺は部屋へと戻る。

布団に入り灯りを消すと、すぐに眠りについた。隙間風が入る部
屋はいつも寒い、だから小さな弟や妹がときどき俺の布団にかつて
にもぐり込んでくる。今日も潜りこんで来ていた。小さな頭をそつ
と撫でて再び眠りについた。

爆音で目が覚めた。部屋は崩壊して原形をとどめてなかった。隣
で寝ている弟をゆすったが起きる様子がない。しかたなく押しどけ
ると動かない理由がすぐにわかった。弟の背中には毛布を貫いて大
きな木片が突き刺さっていた。毛布が真っ赤に染まっていた。

俺は起きあがり辺りを見回すと、夜のはずなのに辺りを見回せる
ほどに明るかった。あちらこちらから火の手が上がり、辺りを照ら
していた。飛び起きると、部屋へを飛び出した。屋敷のほとんどは
崩壊していた。走って一階へと向かう途中にトルードがいた。

「何があった？」

「過激派のヤツらだ！」

過激派はレベル採掘に反対し、武力的に採掘場や採掘する村を襲
撃する、非合法組織だった。

「みんなは？」

「無事な弟達はリーチェが連れて逃げた、俺は残った奴がいなか
探していたが、もう誰もいない」

「そうか……」

話していると、屋敷に誰か入ってきた。

「おい、金目の物を探せ！」

覆面をつけて武器を持った男達だった。

俺たちは物陰に隠れて息を潜めた。するとトルードが飛び出して男に襲いかかった。

「なんだこいつ！」

トルードは男から武器を奪い取り男を倒した。

「これで、弟達の仇をとる！！ ジェス……手伝ってくれ」

俺は深く頷いた。トルードはすぐに他の男も倒して武器を奪い取り俺に手渡した。

「使い方は判るよな？」

頷く俺を見てトルードは笑った。

トルードと俺は見事な連携で過激派の奴らを倒していった。

「俺とお前が組めば向かう所敵なしだな」

トルードは笑いながら言った。ほとんどの過激派を倒して油断していた。

轟音が響いた。

膝からトルードは倒れた。

「トルード！」

胸を撃ち抜かれたトルードは息絶えていた。

すぐに次の轟音が響き、すぐ脇の地面がえぐれた。

遠方から狙撃されていた。すぐに俺は物陰に身を隠した。

するとそこへシエスタが走って向かってきた。

「ジェス兄ー！」

ボロボロになったシエスタが必死にこちらへと走ってくるのを見て俺は叫んだ。

「シエスタ、来るなー!!」

しかし、シエスタは懸命に俺の方へと向かって走ってきた。

そして轟音が響いた。

頭から飛沫を上げてシエスタは倒れた。俺は飛び出してシエスタを物陰へと引きずった。隠れるときに右足をうたれたが、不思議と痛みは感じなかった。

もうシエスタは動かなかった。

時折、遠方から轟音がなり響く。地面から土を握りしめる。無力を噛みしめた。なにも出来ない事が齒がゆかった。

村が一つ過激派の手によって壊滅させられた。しばらくして村へ派遣された軍によって過激派は逃げだし、俺は軍に保護された。争いの理由はいつだって単純だ。ただの復讐だ。復讐の為に俺は軍に入った。

時が過ぎても思いは消えない。それは強い憎しみであればあるほどに……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4456q/>

『憎しみ』 【掌編・駄文】

2011年1月27日08時40分発行